

## 通常学級における自立活動の内容を踏まえた

### 不適応行動に関する指導の実践

平原 幸(長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻)

笹山 龍太郎(長崎大学大学院教育学研究科)

#### 1. はじめに

今日の学校における不適応行動として、校内暴力、いじめ、不登校及び学級崩壊、非行などが社会問題化してきている(高橋,2005)。そのなかでも不登校に関しては、学校現場において喫緊の課題であり、不登校児童・生徒への対応や、不登校を未然に防ぐための取り組みの重要性が叫ばれている。これに関連し、学校の抱える問題として「人間関係をうまくつくりだせない子ども」が挙げられている(上菌,2001)。近年は核家族化が進み、地域との関わりも少なくなってきたことにより、子どもたちの人間関係能力の低下につながってきているということが考えられる。そのほかにも、情報化社会の進展などの社会状況の急激な変化により「子どものかかわりの力を育むことが以前に比べれば困難になってきている」とも言われている(曾山,2012)。それにより、対人関係をよりよくする技術が育ちにくいことから、不登校などの不適応行動につながるということが考えられる。つまり、不登校などの不適応行動を防ぐためには、子どもたちのよりよい人間関係の構築が重要であるということが指摘できる。

文部科学省(2003)「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」では、不登校との関連で新たに指摘する課題として「LD、ADHD等の児童生徒については、周囲との人間関係がうまく構築されないという状況が進み、不登校に陥る事例は少なくないとの指摘もある」と挙げている。これを踏まえると、特別支援教育と生徒指導は切り離すことができない課題であり、関連させて考えることが重要であるということがわかる。つまり、不登校などの不適応行動を防ぐための対応として、通常学級においても特別支援教育の視点が必要であると指摘することができる。

特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」のなかには「小学校又は中学校の通常学級に在籍している児童生徒の中に、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とした指導が必要となる者がいるため、本書に示した内容を参考にして適切な指導や必要な支援を行うことが望まれる」とある。このことから、自立活動の内容が通常学級の子どもたちにとっても重要であるといえる。また、文部科学省(2009)「子どもの徳育の充実に向けた在り方について(報告)」においては、近年の子どもの人間関係を形成する力の低下が指摘されており、障害

のあるなしに関わらず、自立活動の内容に関わるような人間関係やコミュニケーション等において苦手を抱えている子どもは多い。つまり、自立活動の内容は、障害に限らず全ての子どもたちにとって重要な活動であり、通常学級に在籍している子どもたちへの指導や支援をする上で有効に活用できる内容であるといえる。

## 2. 本研究の目的

これまで述べたことを踏まえ、本実践研究では、自立活動の内容を踏まえた対応を通常学級で行い、その効果について明らかにしていく。また、子どもたちが良好な人間関係を構築することで不登校などの不適応行動を防ぐという視点からも検討を加えていく。

## 3. 方法

本実践研究においては、不登校などの不適応行動が目立ち始める中学生を対象とし、行動観察やアンケートを基にしながら実態把握を行い、これを基に自立活動の内容を踏まえた授業実践について検討する。また、再度アンケート等を実施することによって生徒たちの変容を分析し、実践の有効性について探っていく。

対象生徒：長崎市内 X中学校 1年A組

実習期間：2012年5月上旬～2012年10月下旬

### (1) 行動観察

学級全体としては、男女の仲が良く、元気で明るく活発な生徒たちであるという印象を受けた。しかし一方で、ネガティブな発言をする生徒が多く、自分に自信を持つことができなかったり、対人関係で苦手を抱えている生徒が多いということがわかった。行動観察においては、気になる生徒として3名の生徒を挙げている。

- ・毎日遅刻をし、学習面で遅れがちな生徒 A
- ・人との関わり方やコミュニケーションの取り方に苦手を感じている生徒 B
- ・場の空気を読むのが難しく、突拍子のない発言をする生徒 C

これらの生徒に関しては、全体への指導に加え、個別にも対応が必要であると考えた。

### (2) 学校生活アンケート

生徒の実態把握を行う上で、客観的に把握し検討するためにアンケートを作成した。アンケート項目は、文部科学省指定の特別支援教育推進に関する研究開発学校で作成・実施されたものを参照とした。内容としては、「聞く」「話す」「対人関係」「不注意」「多動性・衝動性」などに関する項目が盛り込まれている。

結果としては、聞く・話すといったコミュニケーションに関わる項目において苦手を感じている生徒が多いということが挙げられた。

### (3) Q-U アンケート

生徒の実態把握の手法として、学校生活アンケート並行してQ・Uアンケートを行った。なお、これは比較対象としてB組にも実施している。

1年A組(実施時期：2012年5月22日)

1年B組(実施時期：2012年5月22日)

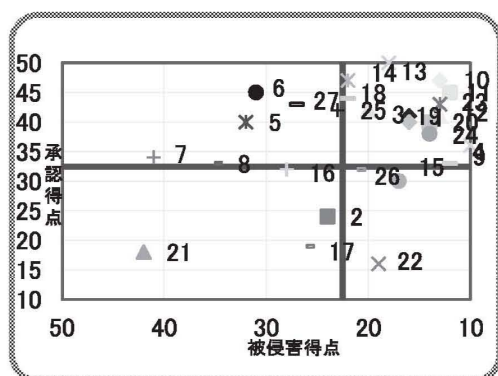


図1 1年A組の学級満足度尺度の分布

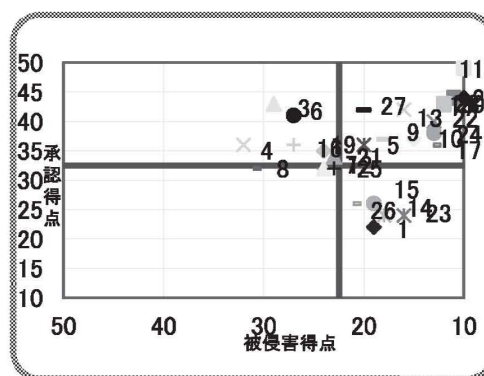


図2 1年B組の学級満足度尺度の分布

1年A組はやや横広がりの満足型のグラフとなっている(図1)。侵害行為認知群の生徒の割合が全国平均17%を超え19%であった。ここから、学級内での規律を徹底させる必要があることがわかる。また、承認得点の低い生徒が存在することから、リレーションの確立を視野に入れた対応が重要である。比較対象の1年B組の結果としては、満足群が多く、要支援群の該当者はいないという結果となった(図2)。全体的にまとまりのある結果となっている。

1年A組のグラフにおいて、前述した行動観察と照らし合わせると、生徒Aは22番、生徒Bは21番、生徒Cは2番である。生徒Aは、非承認群に位置していることから、生徒が自分の居場所を感じることができるような指導や支援が必要となってくるということがわかる。生徒Bは要支援群に位置しており、このままでは不登校に結びつくことも考えられることから、早急に対応が必要である。生徒Cは学級生活不満足群に位置しており、承認得点が低いことから、この生徒が学級内で居場所を感じることができるような支援や、生徒自身の対人面でのスキルを伸ばしていくことが重要となってくるといえる。これらの生徒の学校生活意欲尺度の結果は以下のとおりである。

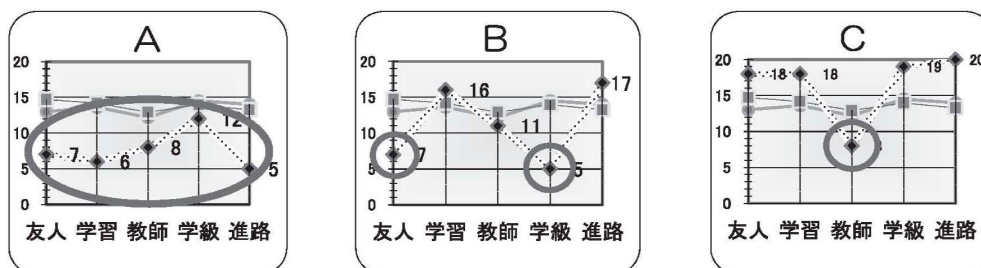


図3 生徒A・B・Cの学校生活意欲尺度

生徒Aは、学級以外の項目が全て低くなっている(図3)。この生徒は、毎日遅刻をしてこることから、まずは朝からきちんと登校することで自信を持たせ、授業のすべてに参加ができるように促すことが大切になってくる。また、学級の意欲は平均に近いことから、学級での居心地はさほど悪くないと感じているため、学級内での友人関係を構築していけるような指導が求められる。

生徒Bは、友人と学級に対する意欲が低くなっている(図3)。この結果から、友人や学級との関係において苦手を抱えているということがわかる。人との関わり方に焦点を当てて指導や支援をしていくことが必要である。

生徒Cは、教師に対する意欲が低くなっている(図3)。この生徒は場の雰囲気を読むことが難しく、突拍子のない発言がよく見られ、それがきっかけで教師から叱責を受けることが多いようである。この生徒については、まずは教師との信頼関係を構築していくことが重要となってくる。叱責ばかりでなく、頑張りが見えたときにはきちんと誉めてあげるといった指導が求められる。

#### 4. 実践

生徒の行動観察や学校生活アンケート、Q-Uアンケートの結果を基に、生徒の人間関係やコミュニケーションに焦点を当てて実践を行った。実践の内容は次の四つの柱で構成した。

- |                          |
|--------------------------|
| (1)朝の短学活における継続的なゲーム形式の活動 |
| (2)道徳における授業実践            |
| (3)学活における授業実践            |
| (4)個別への対応                |

学級全体に対しては「よりよい人間関係の構築」をメインテーマとし、自立活動の内容を参照しそれと照らし合わせて、不適応行動を防ぐという視点から実践を考えていった。個別への対応としては、休み時間や昼休み、放課後等の時間を利用して、ピックアップした3名の生徒A・B・Cを中心に介入を行った。

##### (1)朝の短学活

朝の短学活では、10分程度で行う4つの活動を実施した。

##### ・ソーシャルスキルチェック

どのソーシャルスキルに課題があるのかを認識させ、自分自身を振り返ることにより今後の生活に生かしていくことができるようにした。また、このチェックリストの結果も参考にしながら、今後の授業実践について検討することとした。

上達したいスキルに関しては「人の話をしっかりと聞ける」「スムーズに会話に入る」といった対人関係やコミュニケーションに関わる記述をしている生徒が多く見られた。生徒Bも他の生徒と同様に「聞く」「会話に入る」を課題と挙げた(図4)。生徒Cは上達したいスキルとして「周りの空気が読める」を挙げており、この生徒が自分自身の課題を的確に理解しているということがわかる(図4)。この実践は自立活動の「人間関係の形成(3)自己の理解と行動の調整に関する

こと」との関連を図っている。

あなたのソーシャルスキルは何点だったかな？ 合計点( 60 ) これから上達したいソーシャルスキルを二つ考えてみよう！ スマートな話し方；特に、会議で立つべきか迷った時 人の話をしっかりと聞けること... コメント	あなたのソーシャルスキルは何点だったかな？ 合計 これから上達したいソーシャルスキルを二つ考えてみよう！ 周りの空気が言売める。 人の話をしっかりと聞けること... コメント
---	---

図 4 ソーシャルスキルチェックにおける生徒 B と生徒 C の記述

・リフレーミングをしよう ～短所を長所に～

自分自身を見つめ直し自分の長所を認識すること、また、見方を変えることで短所が長所にもなるというリフレーミングを行い、ありのままの自分を受け止め、自信を持つということにつなげていきたいと考えた。この実践は自立活動の「人間関係の形成(3)自己の理解と行動の調整に関すること。」との関連を図っている。

・共通点探し ～友人との共通点をたくさん見つけよう～

自分と仲間との共通点や相違点に気づくことで、自分の特徴や仲間の特徴を受け入れることをねらいとした。ペアになりゲーム形式で行うことで、活動に対する意欲を持たせるようにした。この実践は自立活動の「人間関係の形成(1)他者とのかかわりの基礎に関すること。」「コミュニケーション(2)言語の受容と表出に関すること。」との関連を図っている。

・エスパー ～協力して推測しよう～

教師がいくつかのヒントを出し、教師が考えているものが何かを当てるというゲームである。ルールを理解し守るということを第一のねらいに挙げた。また、チームで協力して話し合いをすることで、自分の意見を表現したり、他者の意見を聞いたり尊重するという態度を育成することとした。この実践は自立活動の「人間関係の形成(4)集団への参加の基礎に関すること。」「コミュニケーション(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること。」との関連を図っている。

(2) 道徳

道徳では、自立活動の「人間関係の形成(1)他者とのかかわりの基礎に関すること。」「人間関係の形成(3)自己の理解と行動の調整に関すること。」の内容を参照しながら、金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」の詩を用いて、生徒同士がお互いの価値観や違いを認め合い個性を大切にすることを養うことを目標とし授業を行った。ワークシートでは、全体としては「個性豊か」「それぞれにいいところがある」「それぞれの個性を認めていきたい」「友達を大切にしていきたい」などの記述が多く見られた。また、生徒 A は「みんなが書いたことばがいいなあと思いました」という記述をしており、他の生徒の意見を認めているということがわかる(図 5)。生徒 C は「みんな形は違うけど一生懸命になろう」という記述

をしており、自分自身を大切に生きていくという気持ちが読み取れる(図5)。これらの記述から、自分や他者の個性を認め合い大切にするという心情を養うことができたことが示唆される。

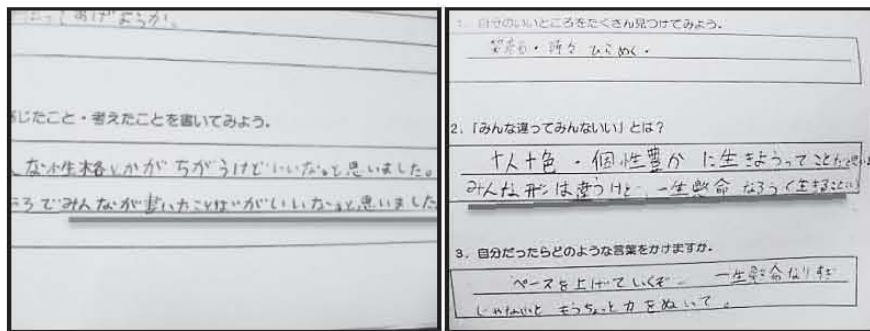


図5 道徳における生徒Aと生徒Cの記述

### (3)学活

学活では、自立活動の「人間関係の形成(1)他者とのかかわりの基礎に関すること。」「コミュニケーション(5)状況に応じたコミュニケーションに関すること。」「人間関係の形成(4)集団への参加の基礎に関すること。」の内容を参照しながら授業を構成した。生徒たちが無人島に漂着したと想定し、生きていくために重要だと考えるものをアイテムリストの中から選択するという活動を行った。この授業を通して、自分の意見を述べる力と、他の人の意見をきちんと聞くという力を身につけさせたいと考えた。また、話し合いの中で一番大事な意見を導き出すという活動を行うことで、生徒たちのコミュニケーション能力の向上にもつなげていくことをねらいとした。授業においては、グループでの話し合いをする際のポイントを提示した。ポイントは①言う(理由を言う)、②聞く(否定しない)、③まとめる(大事な意見を優先する)の3つである。最後の振り返りシートでは、3つのポイントに関して「難しかったがとても大切であると感じた」という記述が多く見られた。生徒Cは「人の話を真剣に聞くことはすごく難しい感じがしました」という記述をしており、ここから人の話を真剣に聞こうとしていた姿勢が見て取れる(図6)。また「お互いに認め合うことが大切」という人との関わりについて述べている生徒もいた(図6)。生徒たちが人との関わり方やコミュニケーションについて見つめ直し、今後の行動について考えるきっかけとなったと示唆される。

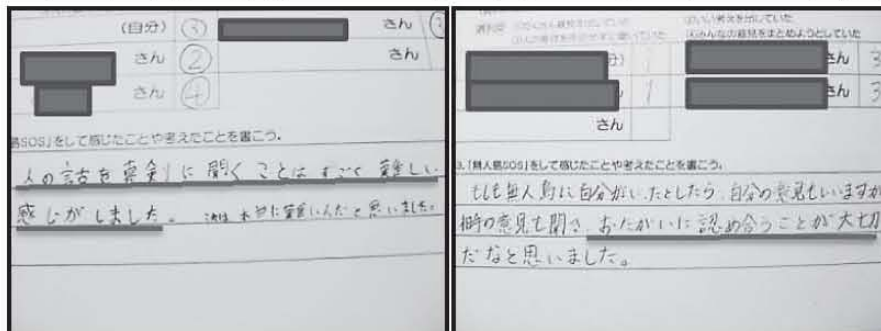


図6 学活における生徒Cと他の生徒の記述

#### (4) 個別への対応

##### ・生徒 A

遅刻による学習面での遅れが顕著であったため、授業中における学習面の補助を行い「できた」「わかった」という体験を積ませることで少しでも自分に自信を持たせることができるようにした。

##### ・生徒 B

放課後等の時間を利用し、教師が友達役となって会話の練習をしたり、別の友人に手伝ってもらい会話の途中からスムーズに入る練習を行った。また、言葉と表情が一致していないことが多かったため、表情を豊かにしたり、声に強弱をつけたり、身振り手振りを使って伝えるといった練習を行った。

##### ・生徒 C

突拍子のない発言が見られた際にはきちんとその場で指摘をするようにした。また、努力が見られた際にはきちんと誉めてあげることで「先生は自分を見てくれている」という感覚を持たせることができるようにした。

### 5. 結果と考察

実践後に再度 Q-U アンケートを実施し、生徒たちの変容の結果を把握し、考察を行った。

#### (1) 全体の変容

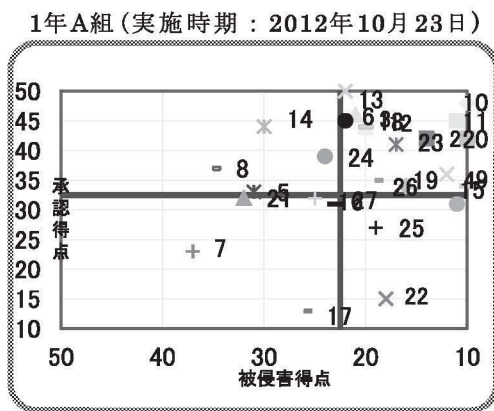


図7 1年A組の学級満足度尺度の分布

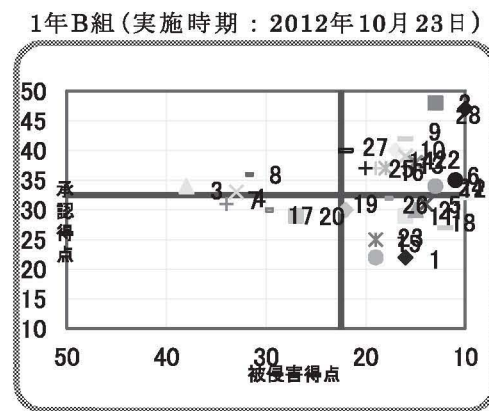


図8 1年B組の学級満足度尺度の分布

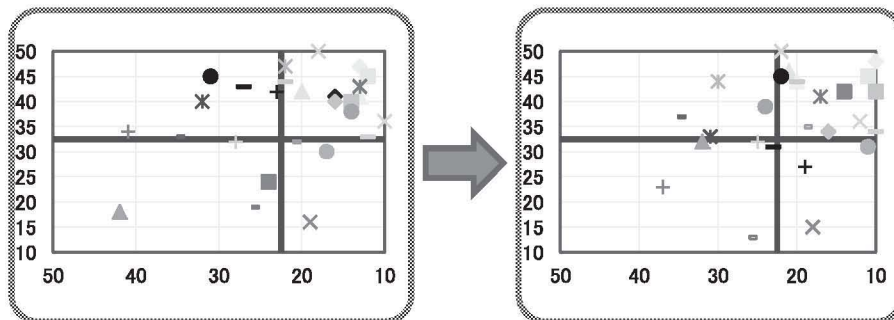


図9 1年A組の学級満足度尺度の変容

1年A組の全体の分布を見てみると、5月と比較するとまとまりのあるグラフ

に変化している(図 9)。全国平均を上回っていた侵害行為認知群の生徒の割合は平均内に入り、ここから規律の徹底がみられ始めているということがいえる。

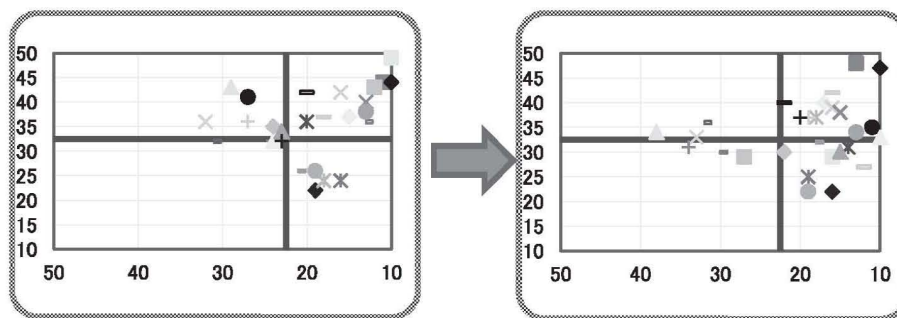


図 10 1年B組の学級満足度尺度の変容

1年B組は、横広がりのグラフへと変化している(図 10)。また、非承認群の割合が16%から29%へと上昇し、全国平均の15%を大きく超えていた。

## (2) 個の変容

1年A組において介入を続けていた3名の生徒A・B・Cの変容は以下のとおりである。

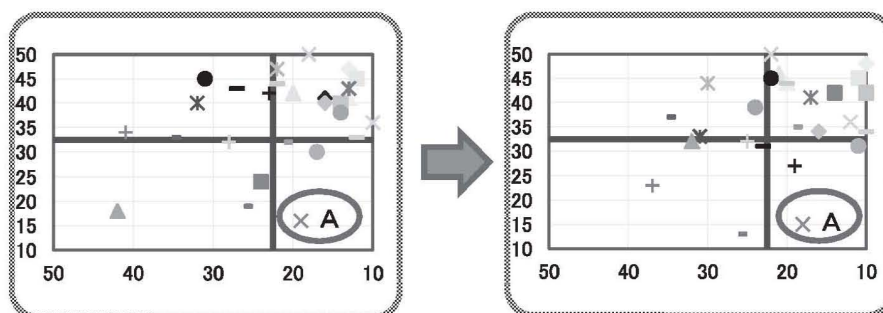


図 11 生徒Aの学級満足度尺度の変容

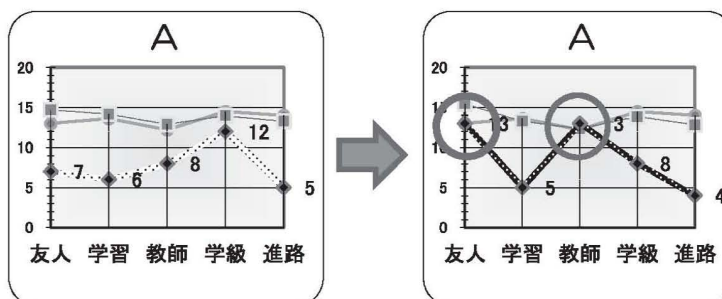


図 12 生徒Aの学校生活意欲尺度の変容

生徒Aは、学級満足度尺度の結果ではほとんど変化が見られなかった(図 11)。学校生活意欲尺度では友人と教師に対する意欲は上昇しているが、他の項目に関しては低い数値となっている(図 12)。このように、Q-Uアンケートの結果としては大きな改善が見られなかったが、行動面では遅刻する回数が減り、朝から学校に登校することが増えた。学校生活意欲尺度の結果を見ると、教師との信頼関係が育まれつつあるため、今後も継続した支援を行うことで、学級に対する満足感



や所属感を向上させることが可能ではないかと考える。

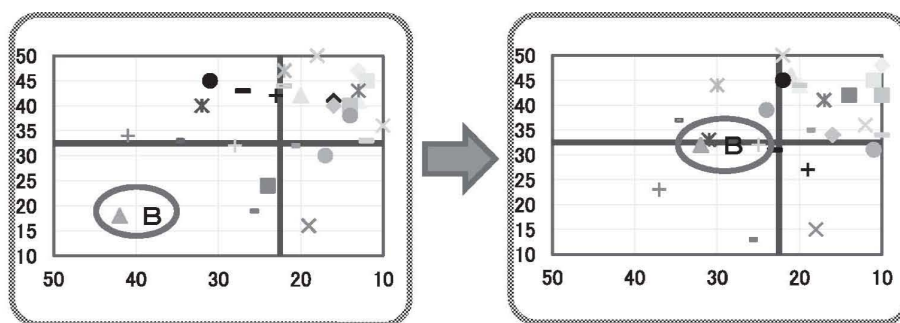


図13 生徒Bの学級満足度尺度の変容

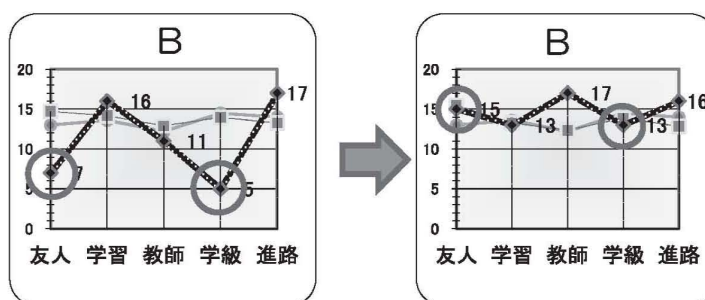


図14 生徒Bの学校生活意欲尺度の変容

要支援群に位置していた生徒Bは、学級生活満足群に向かって上昇している(図13)。個別に話をした際には「人との関わり方が少しわかってきた」「友達との関わり方が上手になってきたように思う」という言葉を聞くことができた。学校生活意欲尺度の結果をみると、友人と学級の意欲が上昇している(図14)。これが学級生活満足群への上昇につながったと考えられる。

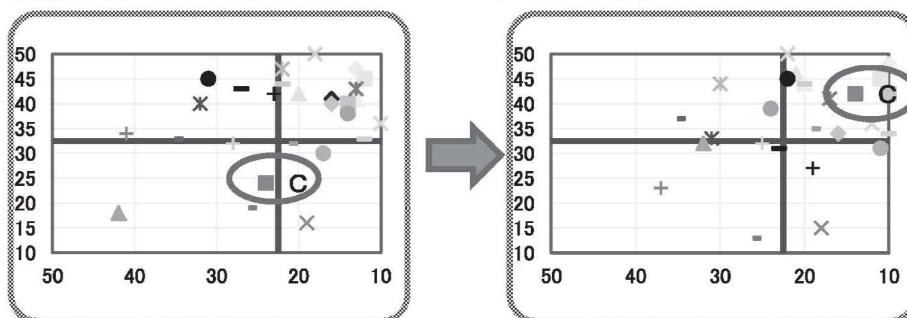


図15 生徒Cの学級満足度尺度の変容

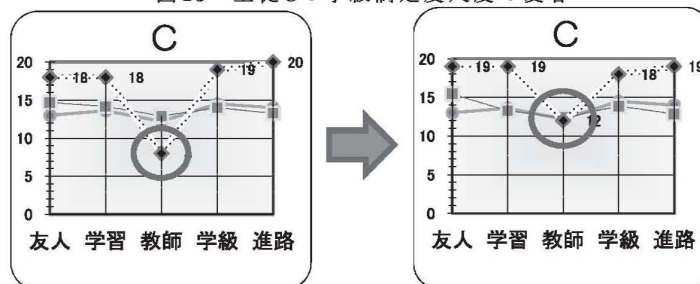


図16 生徒Cの学校生活意欲尺度の変容

生徒Cは、学級生活不満足群から学級生活満足群へと上昇した(図15)。学校生活

意欲尺度を見てみると、教師に対する意欲が平均まで上昇している(図16)。いけない場面ではきちんと指摘をし、頑張ったときにはきちんと誉めることで、教師に対する信頼感が生まれてきているのではないかと予測できる。行動面では場の雰囲気を読んだ発言が減り、以前と比べると他の生徒ともほど良い距離感を保って空気を読んだ行動ができるようになっていた。この教師に対する意欲の向上が、学級生活満足群への移行につながったと考えられる。

## 6. 結論

本実践研究においては、実態把握として二つのアンケートを導入することにより、生徒たちが抱える困難やつまづきに加え、学級に対する満足感や個々の学級内での位置などを把握し、授業実践について考えることができた。また、それぞれの生徒の学校生活に対する意欲を基にして、個々に対する指導や支援について検討することができた。授業実践後の Q-U アンケートの結果からは、介入を行った学級の結果が改善し、個別に対応を続けていた生徒の変容も見られた。このことから、通常学級においても自立活動の内容を踏まえた指導や支援は有効であることが示唆された。つまり、特別支援学校や特別支援学級、通級指導教室の教師に限らず、全ての教師が自立活動の内容を把握して指導や支援に生かしていくことが今後求められてくることが指摘できる。

不登校などの不適応行動を考えてみると、不適応に陥ってから指導や支援をするという考え方だけではなく、不適応行動を防ぐために子どもたちに何ができるのかということを考えることが大切である。つまり、不適応行動につながる人が多いと指摘されている子どもたちのよりよい人間関係の構築や、ソーシャルスキルを高めていくことは重要なことである。今回は自立活動の内容と関連させ、よりよい人間関係の構築をメインテーマとした実践であったが、自立活動の内容を取り入れた指導が不適応行動への対応としても有効であると示唆された。

## 7. 文献

- ・特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」
- ・文部科学省(2003)「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」
- ・中尾繁樹(2009)「みんなの自立活動 特別支援学級・通級指導教室・通常の学級編」明治図書
- ・河村茂雄(2006)「学級づくりのための Q-U 入門」図書文化
- ・上嶋恵(2008)「教室でできる特別支援教育 1 分間集中トレーニング」学陽書房
- ・鬼秀範(2008)「自立活動、自立活動的な学習の実践集 発達障害のある子どもの支援スタートブック」明治図書
- ・上野一彦(2006)「実践 ソーシャルスキルマニュアル」明治図書